JCM ニュース・特集号

「もうせん」「だんつう」「じゅうたん」の呼称考

カーペットはすばらしい　2024 年（令和６年）４月

技術顧問　窪田　衛

【はじめに】

●　「じゅうたん」と「カーペット」はどう違うのか？

という質問がよくあるが、敷物の呼称について歴史を辿ると、「むしろ」「もうせん」「だんつう」「じゅうたん」「カーペット」さらには、「ラグ」「マット」など、いろいろな語句が出てくる。関西大学東西学術研究所発刊の『堺緞通』(1992 年)の序章で、「わが国のように敷物の歴史を欠いているような場合は、語句の区別が欠けていて、言葉のもつ意味を不明瞭にしている」との記述もあり、関連史料が少ないということで、一度紐解いて、語句の語源を考察してみた。

【古来の貢ぎ物・もうせん】

❶　古来から、住まいには、獣毛皮類あるいは、藺草（いぐさ）や藁（わら）、菅（すげ）などの植物類を敷物として用いていたが、縄文、弥生そして古墳時代と進むうちに、獣皮や植物をそのままの状態で使用するのでなく、繊維や糸として編んだり、組んだり、織ったりする技法が生み出されてきた。これらの敷物は、いろいろな呼び方がされた。植物系では、「薦（こも）」「菰（こも）」「蓆（むしろ）」「筵（むしろ）」「褥（しとね）」「茵（しとね）」「ござ」などが挙げられる。

『・・・今以絳地交龍錦五匹絳地縐粟罽十張倩絳五十匹紺青五十匹答汝所獻貢直又特賜汝紺地句文錦三匹細班華罽五張白絹五十匹・・・・』

『魏志倭人伝』からの抜粋

【現代語訳】

「・・・・今、

絳地交龍錦（こうじこうりゅうきん）五匹

（深紅色の地に「交龍」紋が刺繍された絹錦）

絳地縐粟罽（こうじすうぞくけい）十張

（深紅色の地にあわ粒状の縮みのある毛氈）

倩絳（せんこう）五十匹（茜色の織物）

紺青（こんじょう）五十匹（群青色の織物）

を汝が献上した貢物に対して応えよう。

さらに特別に汝に贈ろう

紺地句文錦（こんじくもんきん）三匹

（紺色の地に湾曲模様が刺繍された絹錦）

細班華罽（さいはんかけい）五張

（細かく散りばめた花模様の毛氈）

白絹五十匹（無地の絹織物）・・・・」

【注】

・「匹（ひき）」・・・古代中国では、１匹＝２反分（４丈；約９m）。

・「張（ちょう）」・・・「枚」数を表す。

【参考資料】

・「魏志倭人伝をそのまま読む」（himiko-y.com）

図１　魏王より卑弥呼への返礼品（一部）

❷　獣毛皮の敷物としての記録は、『魏志倭人伝（ぎしわじんでん）』のなかに初めて現れる。239 年（景初３）卑弥呼が魏王・明帝に朝貢したことに対し、その返礼として、敷物類ほか多くの品々を持ち帰ったことが記されている（**図１**）。中国染織の歴史に詳しい原田淑人博士（故人）によれば、ここに記された「罽（けい）」は、毛製品で、その数え方が、一匹（ひき）二匹という反物ではなく、十張（ちょう）五張（十枚五枚）、とあるのは、矩形状の敷物を意味しているという。この「罽」とはどのような敷物であったのかは後述するが、この時代（３世紀）の中国に繊維敷物が存在した有力な史料となっている。

❸　紀元前５世紀頃、南ロシアのスキタイ民族の墳墓から、フェルト遺品が出土されている。漢民族は、このようなフェルトに「氈（かも）」という字を当てたのである。辞典『釈名（しゃくみょう）』（巻第六・釈牀帳・第十八）（後漢末期）によると、「氈は、旃（せん）なり、毛相着き、旃々たるなり」とあり、毛が互いに搦み合って密着する羊毛の縮絨性を利用し圧縮して作った毛製品に他ならない。また『日本書記』のなかに、554 年（欽明天皇 15）百済王聖明が、新羅を攻略するための援軍をわが国に請うたとき、錦二匹（ひき）、毾氈（たふとう）一領（揃い）を献じたことが記されている。「毾氈（たふとう）」のほか「氍（く）」「毹（ゆ）」などは、『説文解字（せつもんかいじ）』巻八上（後漢時代の字書）に、「皆、氈綫（せんたん）之属」との記録があり、即ち、６世紀には、「氈（かも、せん）」を献上品として受けていたことになる。

❹　日本は、奈良時代以前にペルシャと接点があったことは、意外に知られていない。７世紀、紛争でペルシャ人（当時は、ササン朝）が中国・長安に移住してきた際、ペルシャ文化を持ち込み、そして、日本は当時の遣唐使により、そ

毛氈

花氈第四号

236 × 124cm

中央の童子は、手に、ポロ競技用のスティックを持っている。実は、ポロ競技の起源は、紀元前6世紀のペルシャと云われ、インド、中国、日本に伝来したが、英領植民地インドでイギリス兵が、この競技をみて本国に持ち帰って発展させた、と伝えられる。

図２　毛氈 / 正倉院宝物